知識の構造化とその活用を図る小学校体つくり運動に関する研究

清田　美紀（福岡教育大学大学院）

１．目的

本研究は，小学校体育科における「知識」に着目し，学習指導要領に示される「知識及び技能」の記述から，運動の行い方に関する「概念的な知識」を整理し，知識を構造化するとともに，その知識を活用して，動きを高めるために，どのようなことを意識して行ったらよいか課題解決の方法を工夫したり，試行錯誤し，課題解決が図られるような授業の展開を考案し，実践することで，構造化された知識を活用する授業の有効性について検討することを目的とした。

２．方法

小学校第５学年 37 名の児童を対象に，全７時間の体つくり運動の授業を行った。ここでは，①「『概念的な知識』を手がかりに，動きを高めるために何を意識して行ったらよいか，考えてやってみる」から，②「個の活動とペアやグループでの活動を組み合わせ，思考と試行を往還させて課題解決を図る」へと，整理した概念的な知識を活用し，課題解決を図るという展開で授業を行った。

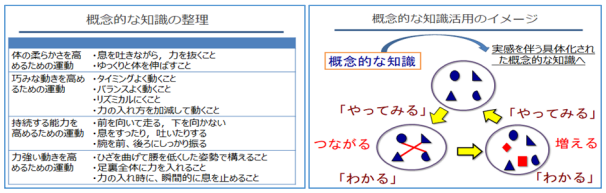

図　整理した概念的な知識と知識活用イメージ

この授業の有用性について検討するため，「動きが高まったか」に関する授業者による観察評価と，質問紙による調査を行った。質問紙による調査では，「運動の行い方」について，対象者の記述データを KHCorder（樋口，2014）[1] による計量テキスト分析と，「成果、意欲・関心、学び方、協力」について対象者の形成的授業評価により，分析を行った。

３．結果と考察

１）「運動の行い方」に関する記述内容の分析から

対象者 37 名が，「運動の行い方」について記述した内容について，KHCorder（樋口，2014）[1] によるデータ分析を行ったところ，頻出語句や頻出する語と語との強い共起関係が認められたのは，提示した「概念的な知識」に関する内容であった。提示した概念的な知識を意識しながら運動を行い，やってみる中で，概念的な知識と概念的な知識とをつないで実感を伴い，自分なりの活用ができる概念的な知識を獲得したり，他の活動にも活用可能な概念的な知識へと深化させたりしていく過程を確認した。

２）「動きが高まったか」に関する観察評価の分析から

「体の柔らかさを高めるための運動」「巧みな動きを高めるための運動」「持続する能力を高めるための運動」「力強い動きを高めるための運動」いずれの内容においても観察評価結果によると，おおむね満足の状況に達していることが認められた。運動を行う際に，「動きを身に付けていくために，何が大切なのか」と概念的な知識を示したことで，対象者なりに動きのイメージをもって活動し，動きのかたち，めざす動きを身に付けることへとつながったのではないかと考える。

３）形成的授業評価結果の分析から

形成的授業評価では，全体的な傾向として評価得点，評定が概ね良好な状況である。自分なりのめあてをもち，仲良く，協力して進んで学習を進めることができたことがうかがえる。同時に，「できた」といった技能的な達成や習熟を味わったり，「分かった」という「知識」を得た実感を得たりし，成果を感じていることができたことがうかがえる。本研究で実践した授業における取り組みの工夫が，対象者の学びに有効に機能したものと考える。

４．結論

本研究において計画，実践した内容及び展開は，対象者が構造化された知識を活用し，動きを高めたり，運動の行い方や取り組みを工夫したりすることに有効に機能したことが示唆された。さらには，小学校第５学年の児童においても，学習指導要領に「知識」として，具体的な内容が示されてはいないが，概念的な知識をよりどころとして，知識を活用した学習を行っていくことは，知識を基盤とした深まりのある授業を展開していくことを可能としていくことを示唆するものであった。

＜参考文献＞

1)　樋口耕一（2014）社会調査のための計量テキスト分析－内容分析の継承と発展を目指して－，ナカニシヤ出版.